

# アクティブ・ラーニング授業の実施状況と学習時間

## ーアンケート結果からの分析ー

杉 井 俊 夫

### 1 はじめに

中教審の答申を受けて「学生の主体的な学び」が注目され、その学生の主体的な学習を引き出す教授法として「アクティブ・ラーニング」が推進されている。また、アクティブ・ラーニングには様々な形態があり、これまで既に教員自身も意識せず実施されているものもある。今回、中部大学におけるアクティブ・ラーニング授業（AL授業）に関するアンケートを教育プロジェクト申請準備のために実施する機会を得たので、ここでその結果を公表することとした。今回、多くの専任教員の皆様から回答を得ることができ、紙面をお借りして感謝申し上げる次第である。

### 2 アンケートの概要

今回のアンケートは、回答期間：2014年3月3日（月）～3月14日（金）において、全専任教員についてアクティブ・ラーニング（以下AL）アンケート（卒業研究を除く）をメールにて実施し、回答率30.1%（131人/435人（2014年3月時点））を得た。アンケートの内容は表1に示す。

表1 アンケートの質問項目

| 【質問項目】                   |
|--------------------------|
| 1) 記名制（所属）               |
| 2) 授業名                   |
| 3) 対象学年                  |
| 4) クラス規模（受講者数）           |
| 5) 授業形式（講義・演習・実習・オムニバス）  |
| 6) アクティブ・ラーニングの形式・分類     |
| ①PBL（問題解決型授業）            |
| ②ディベート（討論）の利用            |
| ③ロールプレイング/シミュレーション/ゲーム   |
| ④ピア・ティーチング（学習者同士の教え合い）   |
| ⑤反転授業                    |
| ⑥フィールド学習・体験学習            |
| ⑦クリッカー（Cumoc）を用いた双方向授業   |
| ⑧e-learning              |
| ⑨その他                     |
| 7) 授業サポート数（TA・SA・PS等学生数） |

項目を挙げ、授業形式、AL形式については複数選択が可能な形式とし、実施したことがある形式と今後実施したいと考えている形式にマークの種類を変えて記入いただいた。なお、アンケートでは敢えてALの定義を行わずアンケートを実施した。また授業サポーターとしてTA、SA、PSの人数を記入できるようにした。

### 3 本学のAL授業の状況

2013年度にAL授業実施してきたという回答があった教員は、119人（専任の27.3%）であり、AL形式の授業の授業数は369件であった。2013年度の開講授業数は非常勤も含めて4,058件であることから、9%以上の授業でAL授業が実施されている。ここで示す数字は専任教員に行ったアンケートの回答があった数であり、実際にはこれ以上の教員、授業でAL授業が実施されていると読み取れる。表2は取り組んだAL形式と、導入したいAL形式に分けて整理している。一つの授業で複数のAL形式を取り入れており、複数実施となっている。

表2 ALの実施と導入したいAL形式

| アクティブ・ラーニングの形式・分類     | 実施している取り組み(授業数) | 導入したい取り組み(授業数) |
|-----------------------|-----------------|----------------|
| PBL(問題解決型授業)          | 124             | 51             |
| ディベート(討論)の利用          | 161             | 38             |
| ロールプレイング/シミュレーション/ゲーム | 81              | 23             |
| ピアティーチング(学習者同士の教え合い)  | 164             | 44             |
| 反転授業                  | 3               | 11             |
| フィールド学習・体験学習          | 99              | 31             |
| クリッカー(Cumoc)を用いた双方向授業 | 12              | 32             |
| e-learning            | 58              | 32             |

#### 3.1 2013年度に実施されたAL授業の形式

2013年度に専任教員によって実施されたAL授業の形式について図化したのが図1.1である。最も多いのが「ピア・ティーチング（学習者同士の教え合い）」である。授業中に一人で考えるのではなく、隣の受講者（エルボパートナー）で教え合う形式である。また2番目に多いのが「ディベート（討論）の利用」である。これは、本来のディベートだけでなく、ディスカッションも含んだ回答になっていると推察される。したがっ

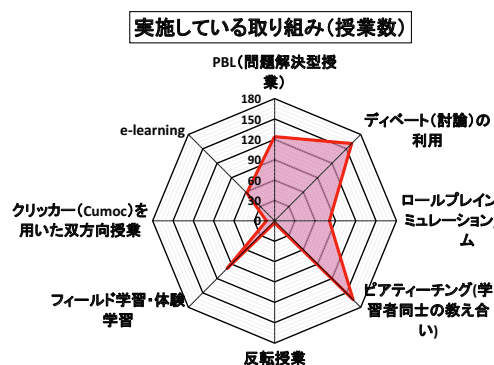


図1.1 AL授業の実施形態

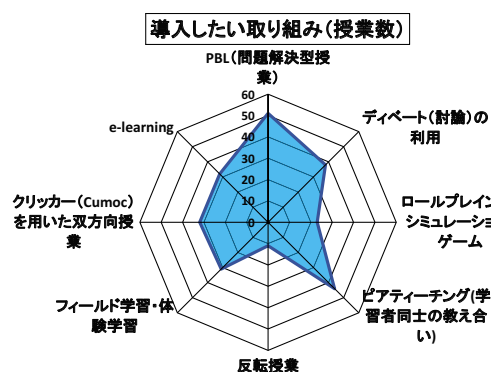


図1.2 導入してみたいAL授業の形式

て隣の受講者等複数人でディスカッションする形式もあり、「ピア・ティーチング」と同じく、授業時間は割かれるが準備としては比較的容易で取り組みやすい形式であり、結果もそのことを表していると考えられる。

3番目に多かったのが「問題解決型授業PBL (Problem Based Learning)」であった。ALから最も想定される形式であり、124授業で実施されている。「クリッカー (Cumoc) を用いた授業」では12授業と以外に少ない。しかし、図1.2に示す導入したい取り組み(形式)では、他の形式と同じように導入したいと考えられており、使用方法の周知によって増加するものと期待される。一方、「反転授業」は実施、導入したい取り組みどちらも低い。「反転授業」は、学生が自宅で授業ビデオなどを見ながら自習し、授業時間では問題を解き、実習するという従来の学習の場が、教室と自宅での場が反転した取り組みである。まだ、認識されていないこともあるが、授業ビデオコンテンツなどの初期の手間も掛かることから授業に導入することが少ないものと推察される。

AL授業になじまない授業を除いた授業への導入に当たっては、授業準備の手間は勿論、授業進度の効率が上がらない、適切なAL手法の教員の知識や学生数と講義室の形態等の要因があると考え、次に様々な側面から整理して分析を行った。

### 3.2 授業規模別のAL授業

AL授業は、受講生数や講義室の大きさなどによっても影響すると考えられる。そこで、図2に授業規模による整理を行った結果を示す。

少人数のクラスほど、AL授業の実施数が多い傾向が読み取れる。授業数の差もあるが、131人以上になると極端に減る傾向がある。しかし、51人以上130人までの規模では、あまり授業規模の差がない。人数が多くなっても130人までの規模であれば、担当教員が適したAL形式を選択していることが考えられる。そこで、規模別に「実施AL形式」と「実施してみたいAL形式」をそれぞれ図3.1、図3.2に示した。

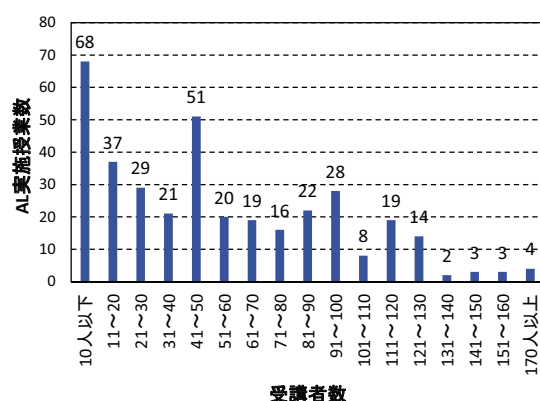


図2 AL授業実施数と受講者数

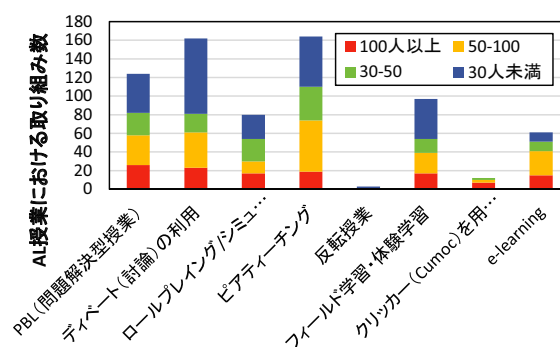


図3.1 受講者別AL授業の実施と形式

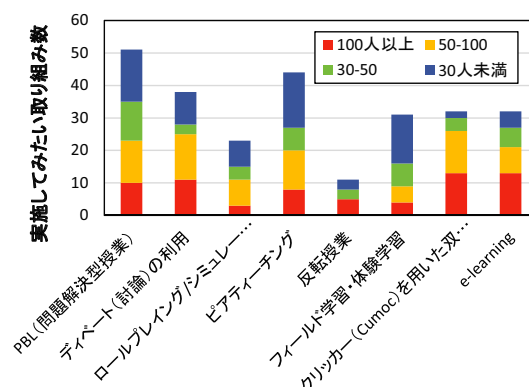


図3.2 受講者別実施してみたいAL授業と規模

図3.1より、「ディベート（討論）の利用」「ロールプレイング/シミュレーション」「フィールド学習・体験授業」は小規模の授業に多い傾向が、また「ピア・ティーチング」「e-learning」は50人以上の人数が大きい場合に多く実施されている傾向がある。「PBL（問題解決型授業）」はグループに分かれて実施することもあり、受講生数にあまり左右されていない結果が得られた。図3.2は実施してみたいAL授業であるが、「ディベート（討論）の利用」「クリッカー（Cumoc）」を用いた双方向授業「e-learning」が50人以上の規模で多く、「フィールド学習・体験授業」は30人未満の授業で多い結果となった。「ディベート（討論）の利用」は人数が少ない授業に実施しているだけでなく、受講者数が多い授業でも利用したいと考える教員が多く、ディベートは授業の総合的な達成目標を評価する重要な手法と認識されているものとも取ることができる。

### 3.3 AL授業の形式と開講年次

AL授業の種類と開講年次について図4のように整理した。ここから、低学年次には、「ロールプレイング/シミュレーション」「クリッカーを利用した双方向授業」「e-learning」といったAL授業が多く、基礎的知識を修得させることにポイントをおいた形式が採用されているように考察できる。逆に、「ディベート（討論）の利用」や「フィールド学習・体験授業」を基礎が終わった高学年に応用として実施されている傾向にある。カリキュラムに沿った適切なAL授業が勘案されているものと考えられる。

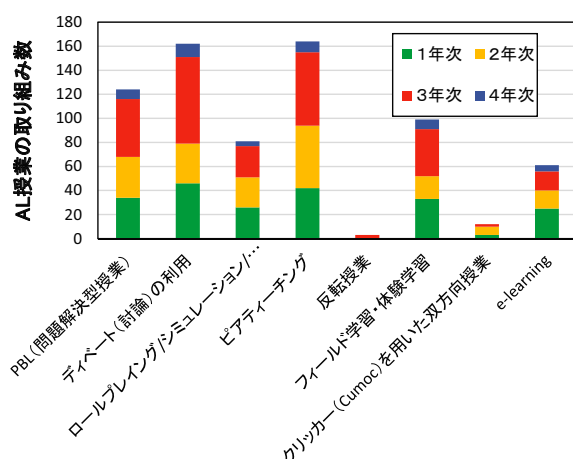


図4 AL授業の取組みと授業開講時期

### 3.4 学部別のAL授業の実施数

AL授業に適した授業、適さない授業があることは、誰しも容易に理解できる。そこで、学部ごとにその違いはあるのか、AL授業が実施されている授業を学部

別に分類してみた。結果を図5に示す。

生命健康科学部、工学部、人文学部、現代教育学部の順でAL授業が実施されている結果が得られた。これは、アンケート回答数でもあるので全てを示しているとは限らないが、参考までに示した。助教以上の人数に比例する傾向が見られたため、助教以上の人数でAL授業取組数を除して学部ごとに教員1人当たりのAL授業取組数を割り出した（全学共通は除く）。概ね、教員1人当たり、0.5取組数となった。理系、文系、資格系学部に関係ないことがわかった。現代教育学部では、教員1人当たりのAL授業取組数は2.0と最も多く、教育者を養成する上で必須の教育形式とも判断できよう。逆に応用生物学部が0.33取組数と最も低いのは、授業規模が他学部に比べて大きいことに因るものと推察されるが、ここでは詳細な分析は行っていない。

また、AL授業の取組が行われる授業の開講年次について、国際関係学部や応用生物学部では高学年次になるほど高い傾向があり、3.3で述べたような「フィールド学習」といったAL形式によるものと考えられる。

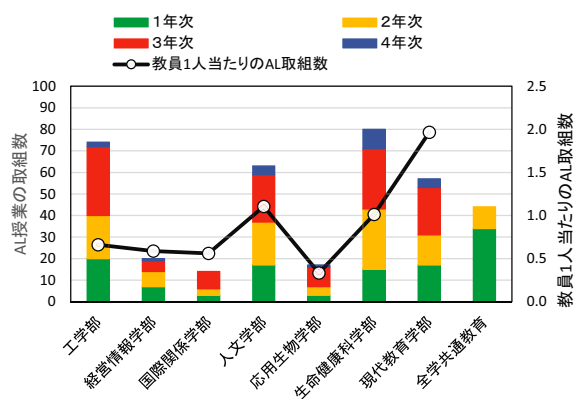


図5 学部別AL授業実施数

### 3.5 1つの授業におけるAL授業の形式

1つの授業に対して、複数のAL授業の形式を取り入れていることが、今回のアンケートから明らかとなり、AL授業を取り入れている中での取組数を図6に整理し、結果を示す。

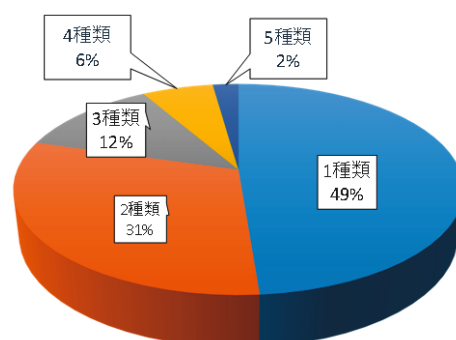


図6 1つのAL授業における取組み数（形式数）

約半数が、1種類だけを取り入れている結果であるが、2種類としている授業も3割ほどあることがわかる。このことから、AL授業を取り入れている教員は、複数形式で取り入れることに抵抗は少なく、授業の達成目標にあった効果的なAL授業形式を教員が考え実施していることがうかがえる。

#### 4 AL授業における1週間の授業外学習時間

次に、AL授業における授業外の学習時間についてAL授業を実施されている先生方にご協力いただき、AL授業を受けている学生に授業外学習時間のアンケート調査を実施した。5月の初めと授業が進んでいなく、またサンプル数（1年から3年時の933人）と少ないが参考までに整理した。サンプル授業数は、受講者数3人から136人の授業で表3のようであった。

表3 AL授業における授業外学習時間の調査

|      | 全学共通 | 学部共通 | 学科専門 |
|------|------|------|------|
| 必修科目 | 0    | 1    | 5    |
| 選択科目 | 2    | 3    | 5    |
| 合計   | 2    | 4    | 10   |

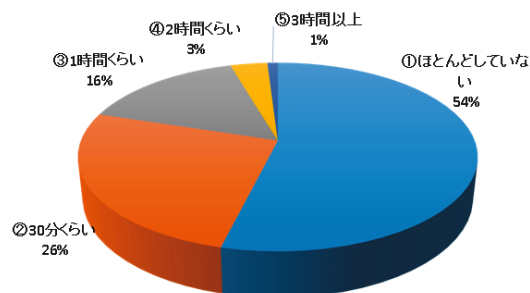


図7.1 AL授業に関する1週間当たりの授業外学修時間

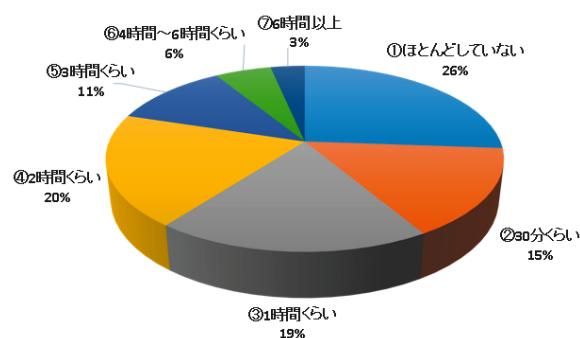


図7.2 1週間当たりの全授業外学修時間の合計

図7.1にはAL授業に関する1週間の授業外学習時間を、また図7.2には、すべての授業に対する授業外学習時間の合計を示す。調査した時期が学期の初めであるため、該当AL授業に関して学外学習時間を持っていない学生が半分ほどいるが、2時間以上という学生もいた。概ね、該当AL授業に対しては30分以内というところである。しかし、学生にとっては、該当AL授業以外の科目もあり、全体としては30分から1時間程度であった。複数科目を履修していることを考慮してみると、AL授業の学外学習時間は少ないとは一概には言えない。現在、実施されているAL授業の形式によれば、「ピア・ティーチング」や「ディベート（討論）の利用（ディスカッション）」など、授業の予習・復習に充てる時間はあまりとられない形式と考えられるが、今後、先に示した「反転授業」などが実施されれば、さらに多くの学外学習時間が延びることが容易に予想される。

#### 5 おわりに

今回、全学を対象として専任の教員の皆様方に、AL授業についてアンケートをお願いする機会を賜り、副学長の後藤俊夫先生を始め、多くの方にご協力いただきました。皆様方に改めて心より御礼申し上げます。ここでとりまとめた内容は、私的で偏った分析になっているかもしれませんが、現状を知っていただくデータとして少しでもAL授業に取り組む、または取り組もうとされる先生方の参考になれば幸いです。

日本高等教育開発協会の沖 裕貴会長（立命館大学教授、中部大学客員教授）が9月のフォーラム閉会の挨拶で、「アメリカでは『主体的な学び』というキーワードは出てこない。さらに日本ではAL授業で学生の主体的な学びを引き出すという矛盾がある。このことをよく理解してAL授業をもう一度我々教員は考え直さなければいけない。」ということをや及されました。AL授業と聞くとPBL授業、反転授業とスキルに目が行ってしまいがちですが、AL授業の最も重要な点であることを気づかされたお言葉でした。

〔大学教育研究センター副センター長〕  
教授 工学部 都市建設工学科